

## 市政60周年に思う

武蔵野の豊かな自然と肥沃な大地、そして母なる川、入間川の恵みを受けて、田園都市として誕生した狭山市は、平成26年7月で市制施行60周年を迎えました。当時は人口も3万1千人余りと静かな街でしたが、首都東京からわずかに37キロという地理的条件下にあたる当市は、その後急速に都市化が進みました。狭山市誕生当時は市内のいたるところで見られた、わらぶき屋根の民家も、日常生活の近代化とともに年々その姿を消し、住みよい住宅都市として確実な歩みを続けました。また、基幹産業であった農業は人の手から機械力へと変わり、県下有数の工業都市としても飛躍的な発展を遂げてきました。

60年にわたるその歩みを振り返りますと、市民生活は豊かになり、生活環境も大幅に改善されましたが、その反面では、私たちの祖先が長年にわたり受け継いできた風習や文化といったものが年々消え去りつつあります。

今、「緑と健康で豊かな文化都市」を標榜する狭山市は、都市基盤の整備を図りながら、緑地の保全に努めるとともに、教育文化の向上や産業を振興させて活力あるまちづくりを推進しています。また、今日的課題である「地域コミュニティの再生」にも力を入れ、物心両面において調和のとれたまちづくりに意を注いでいるところです。

こうした中で、先人が営々と築き上げてきた生活のしきたりや年中行事のこと、さらに古くから



入間川から富士山を望む

語り継がれてきた伝説や昔話など、私たちの生活の中で培われたいわゆる市民の生活史とでもいべきものを、親から子へ、子から孫へと何世代にもわたって伝承していく架け橋になることが、今を生きる私たちの姿ではないでしょうか。狭山市の歴史・文化・伝統というものが次世代を担う「さやまっ子」たちに継承されていくことが、狭山らしさを未来へとつなげていくことになり、この「らしさ」が、将来の「おらがまち狭山」の背骨になるはずです。

私は鶉ノ木に生まれ育ち、この地で今を生きています。幼少の頃を振り返ると春には稲荷山のツツジが満開になり、父母と散歩にでかけました。その頃の稲荷山の北斜面地には、大きなくぼみが点在していたため、ある時、母に「あの穴は何？」と尋ねたことがあります。母は、「あの穴は獣の足跡だよ」と答えてくれたことを覚えています。少し成長した私が、その穴は米軍が落した爆弾の跡だと気付くことは容易なことでした。母は思い出したくない戦争のことを小さな嘘で隠したのかもしれない。

そんな思い出のある稲荷山公園のツツジを元気にさせたいと、昨年5月に約半世紀ぶりに「稲荷山のつつじまつり」を復活させることができました。ツツジとともに生き、この地の歴史や文化や伝統をまるごと、未来にバトンタッチしていくことが私の夢のひとつです。

狭山市文化団体連合会は、狭山市が満60歳という節目の年に、設立15周年を迎えることができました。私は2年前から選任理事となり、今年の芸術祭では事務局長という大役を務めさせていただきました。今後も市内で活躍する約1200名の文団連会員の皆さんと共に、「人を育み、豊かな文化都市」の実現を目指して日々取り組んでまいります。

狭山市文化団体連合会 選任理事  
MJS(みどり・ジャズダンス・スクール) 顧問 太田博希

### 編集後記

早くも年の瀬になりました。市制60周年記念式典では、市政に貢献された方々の表彰があり、文団連関係では、角南一成、砂田弘行、岡野敏伊さん達が、文化祭では公民館活動により高橋登希子さんもお受表彰しました。お祝い申し上げます。

寒さの中、芸術祭にむけ、準備を進めましょう。(高沢正夫)